ヨコハマアートサイト

横浜の地域文化を考える・応援する

中区・黄金町BASE（P.02）

2019 Vol. 022

「特集　素材が循環するまち」

中区・かんきょう文化祭２０１９（Ｐ．０３）

特集 素材が循環するまち

リサイクルを越えてひろがる

1 子どもたちの創作活動でアーティストと地域がつながる

金曜日。アーティストのアトリエが並ぶ黄金町の通りを、放課後の小学生が駆けていく。向かう先は黄金町BASE。2016年にオープンした子どもたちの創作の場だ。表に広げたブルーシートの上で木材を切っている子や、作りたいものがあるらしく三角形の端材を探している子など、それぞれが思い思いに創作活動にいそしんでいる。材料は地域のアーティストから提供された廃材だ。

にぎやかな子どもたちを見守っているのは、アーティストの山田裕介さんと杉山孝貴さん。地域の中でアトリエを構えて活動をしている中で、子どもたちが集まれる場の必要性を感じたことがきっかけだという。「小学校が近いこともあり、子どもがアトリエを訪ねてくることが多かったんです。ここでは、みんな学校や家庭では発散できないエネルギーを創作にぶつけているみたい」と山田さん。マネジメントを担当する水谷朋代さんと共に、地域での取組を積み重ねている。

屋外で活動していると、近所の人からも徐々に声をかけられるようになった。「まちの様子も変わっていきましたね。今は、子どもがいるのが当たり前の光景になった。近くのおじいちゃんがのこぎりを教えてくれたり、周辺の企業が廃材を分けてくれたり、新しいつながりも生まれています」。地域のアーティストによる廃材が、ユニークな形の素材として子どもたちの手に渡ったことで、次のアクションへとつながった。

「作品として生まれ変わった後、その先をどうつなげるのかという部分が課題ですね。結局捨ててしまうんじゃもったいない。次の誰かに受け渡せるような仕組みを考えています」。

2

捨てられた衣服が形を変え生まれ変わる

中区・横浜ワールドポーターズで『かんきょう文化祭 2019』が開催された。主催は環境問題について人々の関心を促すプログラムを企画・運営する『かんきょうデザインプロジェクト』だ。

会場では中高生が撮影した写真を展示。「行動をおこしていくきっかけとなる情報を創りだしていく」をコンセプトに、ゴミ拾い中の写真や、美しい自然、虫の写真など17作品が集まった。

このほかにも『USEDリメイク服』を、中学生のチアダンスグループが着用し、ダンスを披露するリメイクファッションショーを実施。この取り組みは、中高生が一般家庭から回収された古着の集まる工場を訪れ、リユースとリサイクルについて学んだ後、リメイクに取り組むワークショップを体験するというもの。展示だけでなく、実際にダンサーが着用した姿を発表することで、古着が生き返る様を表現した。リメイク服をつくった生徒は「工場に行って、思ったよりも古着にバリエーションがあって驚いた。環境について考えるきっかけになったイベント」と話す。

自らがリメイクした洋服を着て踊るチアダンサーを、制作した中高生も嬉しそうに見つめていた。

3

工場とアーティストを結ぶ廃材たち

金沢区・山陽印刷株式会社を中心に、付近の工場から提供された廃材をもとに制作した作品を展示する「会社まるごとギャラリー2019」。プロデューサーを務めるのは美術家の田中清隆さんだ。今年度は「熱〜パッション〜」をテーマに、アーティストが思い思いの作品を作り上げた。「まずアーティストには一緒に企業に伺って、気になった廃材を直接持ち帰ってもらいます」と田中さん。それぞれの作品に、フェンスの金網をほぐした針金、穴のあいた金属板、インクの缶など数多くの廃材が使われている。鑑賞者は作品を見て「何からできたものなのか」と想像することで、素材をきっかけにしてより作品に親しむことができる。

作品のなかにはビルの屋上などで使用する排水ドレーンを使用したものもあり、普段人目につかないパーツが、作品になることで人々の目の前に現れるのも面白い。

「アーティストによっては、会社まるごとギャラリーだけでなく、ここでもらった廃材を別の作品で使うこともあるようです。会社にとっては捨てるものでも、アーティストにとっては宝なんです」。

廃材が作品へとかたちを変え、ほかのまちにも広がっているのかもしれない。

4

横浜の町工場と子どもたちが素材で結びつく

都筑の企業から出た廃材が都筑の子どもたちの創造力で新たに生まれ変わる。そんな願いから生まれたのが、都筑区内34社の廃材情報をまとめた『廃材カタログ』(一般社団法人 横浜もの・まち・ひとづくり)だ。代表の男澤誠さんは、自身も産業用ヒーターを扱う株式会社スリーハイの代表取締役として都筑区東山田地区で働いてきた。

2016年から周辺の企業に声をかけ、工場で出る廃材を近隣の小学校等に図工や総合学習の教材として提供する『廃材は宝の山プロジェクト』をスタート。住宅と工場が近接する準工業地域ならではのアイディアだ。「東山田地区はキャリア教育に熱心で、学校と地域の結びつきが強いんです。このプロジェクトも、学校とのやりとりから生まれました。子どもたちも素材に親しむところから、地域の企業がどんなものを作っているのか興味を持ってくれているようです」。

P.3左
かんきょうデザインプロジェクト
「かんきょう文化祭2019」
http://kankyo-design.org/
P.3中
アーティストネットワーク+コンパス
「会社まるごとギャラリー2019」
https://www.anc3434.com/
P.3右
一般社団法人 横浜もの・まち・ひとづくり
http://2080.jp/

ヨコハマ
アートサイト
ラウンジ
Vol.22

地域発
アートでまちと福祉を考える

【会場】さんぽみち アート de スマイル　【ゲスト】大平由子（さかえegaoプロジェクト）、岩上百合子（さかえdeつながるアート）、竹本真紀（美術家）
【聞き手・進行】小川智紀（ヨコハマアートサイト事務局／ＳＴスポット横浜）　【主催】さかえegaoプロジェクト、ヨコハマアートサイト事務局

5 福祉・アート・まちが混じり合ったイベントで

今回は「地域発 アートでまちと福祉を考える」をテーマにラウンジを開催しました。さかえｅｇａｏプロジェクトの大平由子さんと、さかえｄｅつながるアートの岩上百合子さん、黄金町等でも活動する美術家の竹本真紀さんにそれぞれの活動について伺いました。

栄区の福祉事業所が連携して開催するアートイベント・さかえｅｇａｏフェスティバルは、ヨコハマアートサイト２０１９の採択活動のひとつです。

福祉施設で働いていた大平さんは「利用者の皆さんの作った製品をどう販売したらいいのかと考えていたとき岩上さんたちに会いまして、アートと福祉を組み合わせたらいいのではないかと思いつきました」とイベントの始まりについて話します。そして「プロジェクトにアーティストが入ってくれることで、どんどん変わっていきました。アートの前ではみんな平等で、利用者さんの新しい表現に驚くこともありました」と語りました。

それをうけた岩上さんは「大平さんと栄区独自のお土産を作りたいという話になって、各福祉事業所に協力のお願いを手紙にして送ったのがこのプロジェクトの始まりでした」と地道な努力を明かします。

また、竹本さんは自身がまちの中で活動することについて体験談を混じえてその難しさと面白さに触れました。「美術館やギャラリーはアートに興味がある人しか来ないので、自分からパブリックな場に出ていこうという意識がありました。でも人との交流のなかで疲弊してしまうことも多かった。そんなとき助けてくれたのは、やっぱりまちの人だったんです」。

地域文化の風景

6 山の上から港北区を見つめる

鈴木裕也（大倉山記念館）

このあたりはかつて海岸線で、岬のように突き出した地形が動物の尻尾のようなかたちをしていたことから、もともとは「太尾（ふとお）」という名前で呼ばれていました。1932年に実業家で東洋大学の学長を務めた大倉邦彦が「大倉精神文化研究所」の本館として大倉山記念館を建てたのが、大倉山の名前の起源です。

大倉山記念館は1981年に横浜市に寄贈されて、1991年には横浜市指定有形文化財に指定されています。以前このあたりに住んでいた職員がいるのですが「昔は山の下からも、大倉山記念館がよく見えた」という話を聞いたことがあります。今ではすっかり木が伸びてしまって、なかなか館が見えづらいのが悩みですね。駅前のエルム通りは、同じ建築様式を取り入れ、ギリシャのアテネ市エルム通りと姉妹都市となっています。ほかにも、ヴィンテージマンションとして有名な大倉山ヒルタウンや、金沢21世紀美術館を設計したSANAAの妹島和世さんによる大倉山集合住宅など、特徴的な建築物

も多いようです。私も初めてここに来たときは「すごい建物だなあ」と驚きました。古典主義建築の第一人者である長野宇平治が建築したこの館を見たいと、建築学科の学生が見学に来ることもありますね。映画のロケ地に使われることも多いんですよ。

港北区は子どもが多く、お子さん向けのイベントを求められることもよくあります。大倉山記念館の周りも、いつも保育園や幼稚園の小さなお子さんが散歩していますよ。そうそう、子どもといえば、大倉山でイベントをするにあたって「大倉山おへそ」は外せません。ここはお母さんたちが中心となって企画運営する任意団体で、市民の皆さんにとっても、何かイベントをする際には頼もしい存在です。レンタルスペースの運営や、商店会と連携してまちを盛り上げています。

子どもだけでなく、港北区は老年人口も市内3位です。ギャラリーに立ち寄って、「今週は何の催しをやっているの？」と尋ねてくれる方もいらっしゃいます。気軽に文化芸術に親しむ市民の方が多く、お昼は高齢者の方が多く利用していますし、夜は若者がバンドや演劇の練習に使っていることが多いです。今年12回目の開催となった大倉山ドキュメンタリー映画祭は、映画監督を含むボランティアで運営されていて、若い人も多く参加されています。

大倉邦彦はこの建物を自身が理想とする人間像として設計しました。そんな大倉山記念館も今年で築87年になります。ずっとこの場所でまちを見守ってきたのでしょうね。

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、今日も、横浜市内のあっちこっちへうろうろしています。

7 9月15日（日）

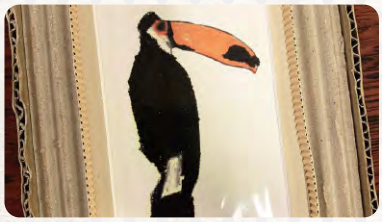
今日は海の公園にて、第21回金沢文庫芸術祭オープニングフェスティバル！晴れて良かった。アート作品の展示販売やフードなど100を超えるブースが並び、歩いているだけでわくわく。口琴というベトナムの楽器を買うと、お店の人が鳴らし方をレクチャーしてくれた。夜8時までパフォーマンスプログラムも盛りだくさんだ。

8 10月1日（火）

横浜の森で美術展やワークショップを行うGroup創造と森の声が、森の中にユルタを設営したと言うのでお邪魔する。この日はハンドパンのライブと民芸品フリマを開催。ハンドパンののびやかな音色があたりを包み込み、ゆったりとした空気が流れていた。壁に掛けられた絨毯が鮮やかで、妙な安心感を覚える。中国の民芸品だというレースハンカチを購入。

9 10月19日（土）

緑区・カプカプ竹山にて、ココロはずむアート展のワークショップに参加。参加作家のポストカードを購入し、それを飾るための段ボール額を制作するというもの。パーツを組み合わせるだけと思いきや、想像以上に細かい作業が多いので緊張する。完成後は参加者同士、「額があると絵のイメージが変わるね」と額装した手元の作品を見合った。



10 10月27日（日）

映画「日曜日の子供たち」の堀田泰寛監督と鶴見小野周辺のロケ地をめぐるツアーのため、鶴見へ向かう。横浜キネマ倶楽部のフィールドワークは寿町に続いて2回目。高齢者保養研修施設 ふれーゆの裏の岸壁は、釣り人でいっぱい。撮影当時は原っぱだったという工業地域を抜けて、小野弁財天神社例大祭まで30分程歩いた。

ヨコハマ アートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動をサポートするため、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動や、横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局
（ＳＴスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団）
〒220-0004 横浜市西区北幸
1-11-15 横浜ＳＴビル 208
（認定ＮＰＯ法人ＳＴスポット横浜
地域連携事業部 内）
TEL：045-325-0410
FAX：045-325-0414
WEB: https://y-artsite.org
MAIL:office@y-artsite.org

@Y_Artsite

ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化活動について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト Vol.022

発行	ヨコハマアートサイト事務局
編集	認定ＮＰＯ法人 ＳＴスポット横浜
テキスト	小川智紀　池田友実 加納美海
デザイン	相澤事務所株式会社
撮影	福井裕子
印刷・製本	株式会社 三島印刷
発行日	2019年12月27日

季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしています。

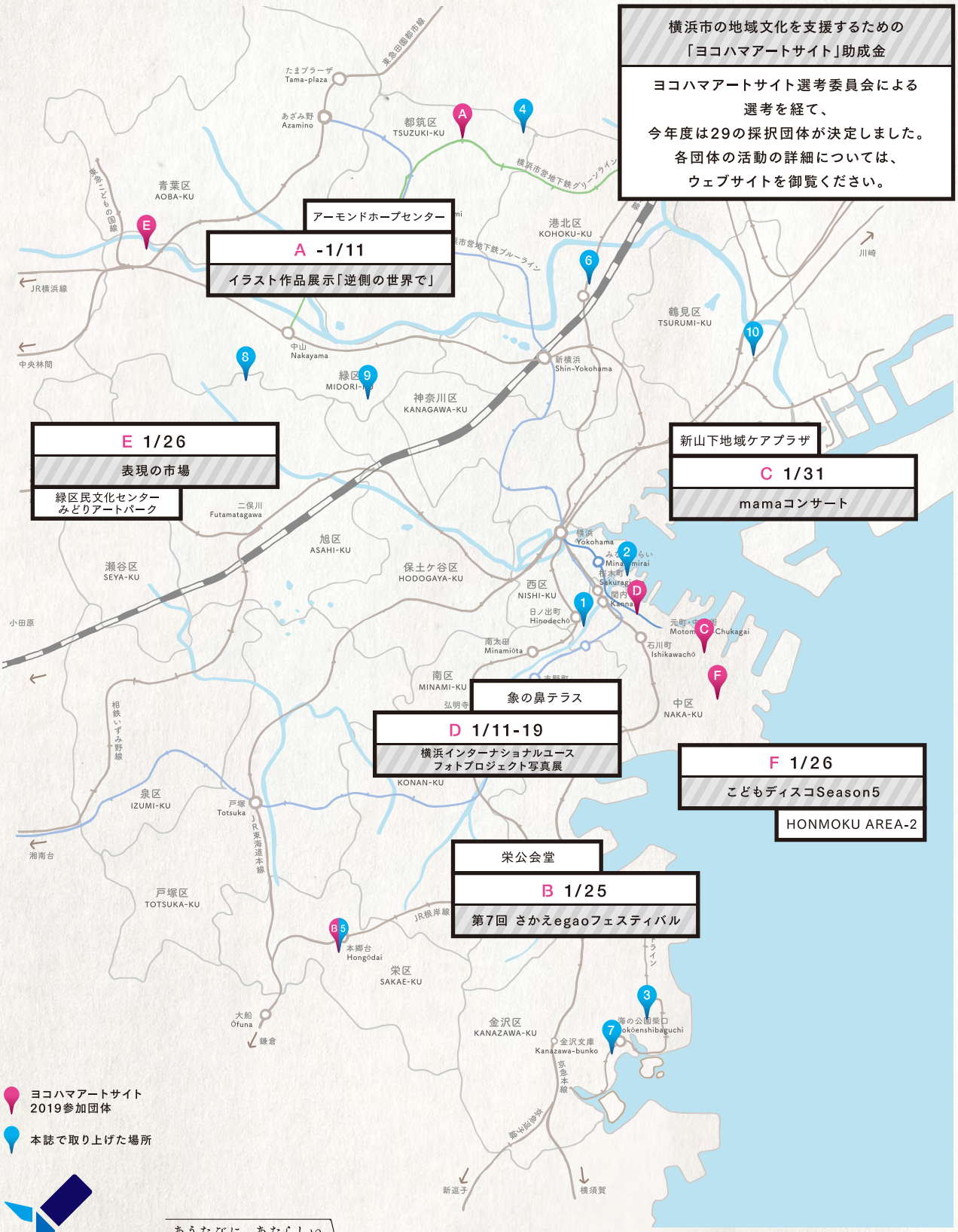
YOKOHAMA ARTSITE

ヨコハマアートサイト　おでかけMAP

横浜市の地域文化をサポートするヨコハマアートサイト2019参加活動によるイベントをピックアップ。
情報には変更がある可能性があります。最新情報はウェブサイトをご覧ください。

横浜市の地域文化を支援するための「ヨコハマアートサイト」助成金

ヨコハマアートサイト選考委員会による選考を経て、今年度は29の採択団体が決定しました。各団体の活動の詳細については、ウェブサイトを御覧ください。



OPEN YOKOHAMA

あうたびに、あたらしい
Find Your YOKOHAMA

最新情報・詳細はこちら　https://y-artsite.org/

ヨコハマアートサイト